質的な授業評価を通した教師のPDCAに関する考察―初任者教師を事例として―

最終更新日：2018年4月27日

【プロジェクト代表者】
教職実践講座教育実践力開発コース
講師　坂井　清隆

キーワード　質的な授業評価（授業分析）　リフレクション（ALACTモデル）　教師教育

プロジェクトの内容（目的・方法・結果と意義）

本研究は，質的な授業評価が，これからの教師教育にどのように貢献できるのか，その可能性の一端を探るものである。具体的には，新規採用教師の授業実践を事例に，質的な授業評価を通した教師のPDCAに関する考察を行うことを目的とするものである。

上記の研究目的を達成するために，以下のような実施計画・方法をもって取り組んだ。

(1)教師の授業改善に総合的に働く諸能力の析出及び質的な授業評価の枠組みの提示

(2)研究協力者による実践及び質的な授業評価のための分析資料（授業記録）の作成

(3)(2)の資料をもとにした実践者による質的な授業評価の実施，及び教師の実践的な「PDCAサイクル」についての考察と検討

(1)に関しては，９月に，佐藤（2015）が示した「実践的思考様式」を参考にして，授業改善に向けて総合的に働く諸能力の析出を行った。特に，即興的対応，想定外の学習者の発言に対する構えなどの諸能力に焦点化して析出した。また，重松鷹泰（1961）の「授業分析」及びコルトハーヘン（2016）のリフレクション論（ALACTモデル）に基づき，質的な授業評価の枠組みを提示した。

(2)に関しては，新規採用教員（T教諭）に研究協力を依頼し，実践（9月）を行った。また，授業記録作成及び授業分析の作成を行った。

(3)に関しては，10月以降に，研究協力者と共に授業実践に対して質的な授業評価を行い，その際のインタビューやリフレクションの記述の検討・考察を通して，新規採用教員の授業改善に向かう実践的な「PDCAサイクル」の有り様を明らかにした。

本研究成果の一端を，第53回日本教育方法学会（2017年10月8日：千葉大学）で発表した。また，2018年3月には，九州教育経営学会研究紀要第24号に論文投稿を行った。

成果の応用可能性（私たちの活動の成果は、このような分野にこのように貢献することができます。）

今回の研究は、特に1コマの授業展開を対象としたものである。本研究成果の応用可能性は、質的な授業評価を、カリキュラム評価に援用・拡大していくことである。小学校学習指導要領（2017）総則では，「児童や学校，地域の実態を適切に把握し，教育の目的や目標の実現に必要な①教育の内容等を教科等横断的な視点で組み立てていくこと，②教育課程の実施状況を評価してその改善を図っていくこと，③教育課程の実施に必要な人的又は物的な体制を確保するとともにその改善を図っていくことなどを通して，教育課程に基づき組織的かつ計画的に各 学校の教育活動の質の向上を図っていくことに努める」について新たに示した（番号及び下線は申請者による）。つまり、これまで、管理職が中心に行ってきた教育課程レベルのカリキュラム・マネジメントは、単元レベルや日常的な授業レベルにおいては、どの教師にも求められるようになったのである（③に関しては、従前の教育課程経営でも述べられてきた）。従って、今後の研究では、特に上記①②の教科等横断的な学習（単元）設計力・評価力としてのカリキュラム・マネジメントに着目した研究を進めていく必要がある。若年教師にとって、カリキュラム（ここでは単元の意味）を自ら構成し、運用・展開していくことは、かなり難しいものであることが予想される。よって、若年教師が、より実効性のある単元レベルのマネジメント（子供の学びを促進させるような臨機応変なマネジメント）が実践できるようにするための研修プログラム等の構築は喫急の課題であると考える。

このプロジェクトの形成に寄与した制度等

平成29年度福岡教育大学研究推進支援プロジェクト経費

プロジェクト構成員（所属・職名・氏名・役割分担）

福岡教育大学教職実践講座（教職大学院）
教育実践力開発コース
講師　坂井　清隆